

# Al-Wajh 地域のキャンプ生活

## Al Wajh 地域

「アバガ・モイヤ（水を呉れ）！」 つんざくような声にふり返ると たった今まで仕事を手伝っていた夫夫のモハムード(第76図)が焼けつくような岩の上にぐったりと坐りこんでいる。まったく無理もない。70kmばかり北へ離れたアブド・アル・ガザスの井戸から水を補給していた給水車(第77図)のタンクが破損したため修理に出して以来もう10日余り ドラム缶に入れた油臭い 時にはポーフラさえ泳いでいる水を頼りに 全員が渴と暑さと疲労に耐えているのだ。「ああ 冷たい水をたらふく飲ませてやりたい」と思った瞬間 異常なまでの喉の乾きをおぼえて 不安が胸をかすめた。口の中はすでにベトつき 唇はもう割れかかっている。

「テストラーハ（休め）」

「ラア・マア・アバガ（いや 結構です）」

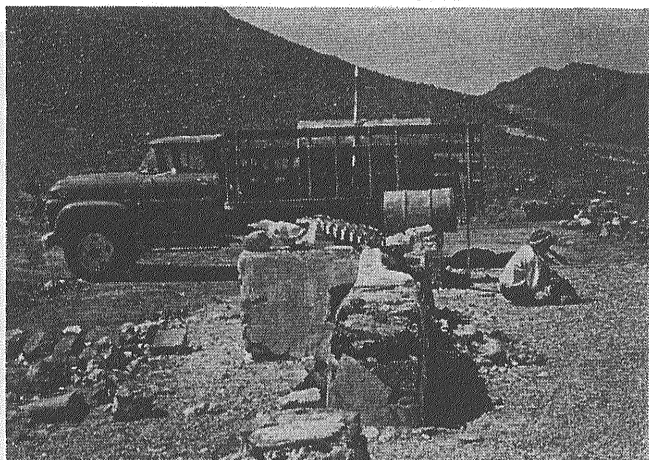
「レイシ・マア・テストラーハ（何故に休まないんだ）」

「エンタ・テシヤラツブ・モイヤ・シュワイヤ・ラーケン・アンダック・ショゴル・ケティール・クンロ・ヨーム・エンタ・ワア・アナ・サワサワ（貴方は少しばかりの水を飲んで毎日一生懸命に仕事をしている。貴方と私は同じです）。「ラーズム・ショゴル（仕事をしなきゃ）」

アラビア語をまだよく解しない私にもよく判るように一言一言区切りながら 応答していたモハムードは 休ませようとする私をふり切るように「ヤンラ・ショゴル



第76図 かつて落下傘部隊の兵士だった夫夫のモハムード



第77図 700 ガロン入のタンクを乗せた給水車 このタンクは荷台上に固定された台の上にボルトでとめてあるが その部分が電気溶接となっているので 間もなく破損した 手前は Um Gurayat 鉱山の稼行当時の建物の跡 その上にはラクダの頭骸骨と背骨

小村 幸二郎

（さあ 仕事だ）」と立上った。かつては落下傘部隊に身をおき また 私たちと同僚のために 両手のひらから鮮血をしたたせながら ぐち一つこぼさずに皮袋で井戸水を汲みつけたこともあるモハムードではあるが 砂混りの強風に耐えて 巻尺を持ち 必死に立っている彼の眼はもううつろだ。1964年12月 年の瀬を間もなく迎えようとする北西サウジアラビアの小高い丘の頂でのことである。

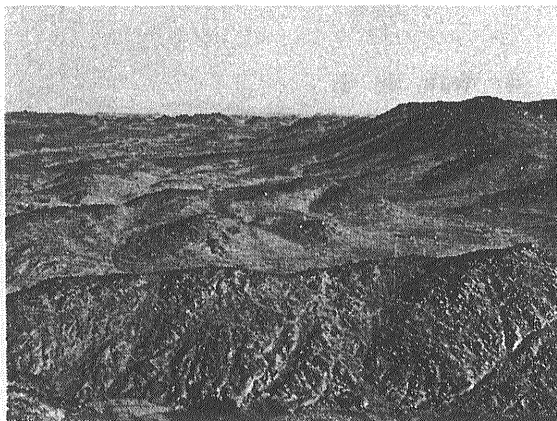
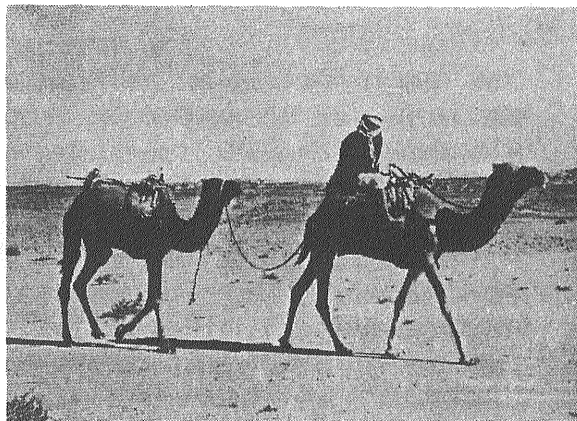
紅海に沿ってひらけた幅10kmばかりの海岸平野(第78図)の東側には ヘジャーズ山脈の中央部との間に 比高50~120mの丘陵がある。かつては豊かな水の流れが 噛み砕いた岩をもてあそんであろう河の底を埋めつくした砂利を押しつけて 灌木がぼつんぼつんと生えている他には緑は見えず 長い年月にわたって自然のきびしさにさいなまれて丸味をもった丘の焼けただけのような褐色の肌は哀れでさえある(第79図)。砂漠ウルシにおおわれたその岩肌は 強烈な陽光を反射して まるで ヤケドの跡のケロイドのようだ。

北西方から南東方へのびるこの丘陵地帯は Al Wajh の東方で 多くの金鉱床を含む。面積およそ1,200km<sup>2</sup>のこの金鉱床賦存地域が ユダヤ王国時代から 壮絶な戦に明け暮れた骨肉相食む時代を経て 現在に至るまでこの国でもっとも重要な金鉱床地域の一つとして注目されてきた Al Wajh 地域である。

私たちは 物資の補給・地形形その他 キャンプに必要な

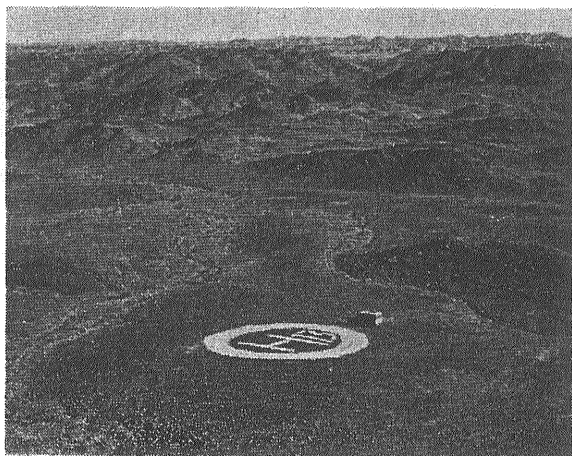
な諸条件を十分に考慮して この地域内でも一番大規模に採掘されている Um Gurayat 鉱山跡をキャンプ地として選んだ。この鉱山跡の一角には 高さ30mばかりの丘の東麓に むかしの事務所の跡がある。丘にかこ

まれた平地よりも2~3m高くなっているここは 小砂利を敷きつめたような地面が平らなのと この丘が夕陽を遮ってくれるので テントを張るには絶好の場所だ。私たち(第80図)は この最上の場所に 寝室用テント・



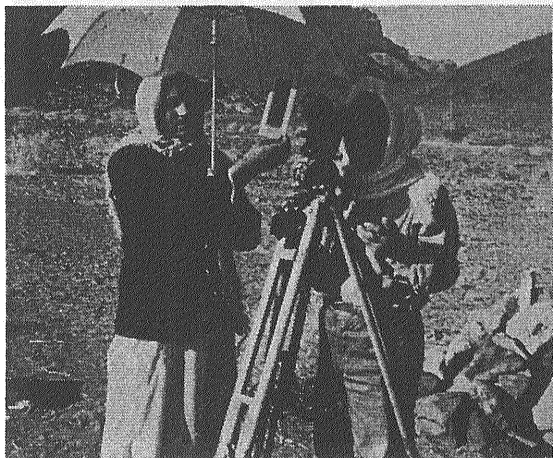
第78図 Al Wajh 南東方の海岸平野を行くベドウィン 右手の丘は10億年前の花崗岩

第79図 a Al Wajh 東方の丘陵地形 この付近の丘は 比高50m前後で 大部分が砂岩で形成されている



第79図 b Al Wajh 東方の丘陵地形 手前の標識は航空写真撮影のためのもので Hは標識設定者の名前の頭文字 13は標識番号を表す 円の中心には1インチパイプが埋められている

第80図 a 奥海 靖 団長 (Al Wajh 東方の海岸平野で)



第80図 b Khor al Arja 鉱山の近くで天体観測中の磯巳代次技官と通訳のアフメッド アフメッドが持っているのはガラス板に黒をつけたフィルター

第80図 c 畠中武文氏(日産鉱業K.K.) (Abu Nathiera 鉱山にて)

第80図 d 桑形久夫技官 (Um Gurayat 鉱山にて)

食堂兼作業用テント・炊事場用テントを張った。人夫や運転手たちは夜遅くまで、ラジオの音量を一杯に上げて唄ったり踊ったりするので、彼等のテントは私たちのテントから100mばかり離れた所に張られた。これだけ離れていれば、余程のことがない限り、彼等の騒ぎもそれ程気にならない。

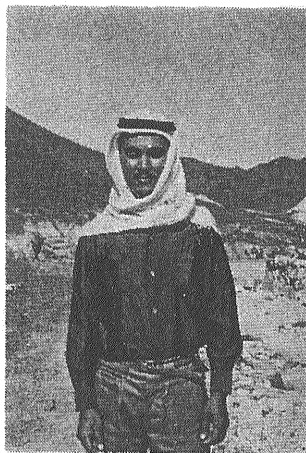
A Wajh 地域にはかつて採掘または探鉱された23の金鉱山と100余の石英脈群がある。やや大規模に採掘された鉱山については、磯巳代次・桑形久夫の両氏が作成した1/2,000実測地形図を使用して、小規模に採掘または探鉱された鉱床と未着手石英脈群については、巻尺とブラントンコンパスとを用いて作成した簡易測量図を使用して調査を実施した。こうして鉱床精査を行なう一方、実測図作成期間中や鉱床調査の間合間を利用して、1/6万縮尺の航空写真を使用して地質調査を行ない、面積1,170km<sup>2</sup>にわたって1/5万縮尺の地質図を作成した。

私は日本を離れる前に、「先カンブリア紀層が調査の対象になるならば、双眼鏡で遠くから眺めただけでも地質図は作れる。楽なものだよ」と親しい友人から聞かされていた。ところが、聞くと見るとでは大違いで、地形も複雑なら地層の変化も断層などによる原構造の改変も著しく、結局は足でかせぐことから脱け出すことはできなかった。先カンブリア紀層に関する先入観のようなものが、いとも簡単に打破られたのはこの地域の地質的特性によるのだろう。

しかし、航空写真判読によって地質現象をかなりよく知ることができるので、調査の速度は日本における調査よりは数段速い。それなのに、ほとんど100%露出しているといっても過言ではないこの地域の主として航空写真によって作成された1/50万地質図の誤りはどうしたことだろう。この地質図上には、広く分布する砂岩も礫岩も珉岩も花崗閃緑岩として、赤色を帯びた砂岩は岩脈として塗色されており、全体としてこの地域の地質図の約70%は誤りである。航空写真の判読による地質図の作成は、いろいろの意味で有効ではあるが、現地でチェックをかなり要する。もしこの地域について、こうした面での作業が行なわれていれば、地質図の誤りはほとんど生じなかったのではなからうか。

確かにこの地域の一部の酸性深成岩と砂岩や礫岩とは写真上では区別しにくいことがあるので、こうした間違いが生じたとしても、あるいはゆるされるものかもしれない。

写真地質の経験のない私は、写真を実体視するたびに判別しにくい岩層になにか特徴がないかと思めぐらす



第80図 e 筆者  
(Um Gurayat 鉱山にて)

ことが多かった。

私たちが調査した区域内には、北東部一帯に1/50万地質図上で花崗閃緑岩として塗色されている区域がある。この区域の写真を実体視している折、私は丘の頂上やゆるやかな斜面に針の先ほどの黒点が見えるのに気がついた。写真上の一般的特徴は、なる程、一部の花崗岩質岩に似てはいるが、この黒点がどうも気になる。そうした疑問は、しかし、間もなく氷解した。黒点の正体は、礫岩層が風蝕されて、丘の頂上や斜面に、経10~50mの茸状か万頭のような形をしている部分だ。

ふだん気にとめることもなさそうな、こうした写真上の微細な特徴を、私は私なりに、拾いあげながら、地質調査に役立て、そして、調査区域の余白を埋めていった。

キャンプの朝は早く、午前6時、東の空を茜に染めて太陽が昇る頃、サラー(祈り)の声と共に明け、そして焼けつくようなサウジアラビア王国の一日がはじまる。

午前6時半起床、7時に朝食、7時30分か8時に出発して2時頃まで、直射日光にさらされながら、調査は休みなく続けられる。3月頃から10月初旬までは、カゲロウがじゃまをするので、とくに測量業務を順調に進めることがむずかしい。ひどい時には、一日中、すぐ近くの山が完全に見えなくなるか、または、まるで南面でみるように、山の頂上だけが見えて、ふもとの方はまったく見えなくなる。そうなる、と、測量しようにも目標がまったく見えぬか、または、大きくゆれるので、どうにもならない。おまけに、こういう時期には、得てして、竜巻が起こったり、砂塵を含んだ熱風が吹きつけたりするものだ。とても仕事どころの騒ぎじゃない。従って、測量班は、日中を避けて、夜明けと共に仕事にかかって10時か11時頃に一応終了、午後4時過ぎ頃から日没頃まで再び仕事をすることもある。



第81図  
お祝用のアガール（頭にのせる輪）をした 1964年元旦の加藤完技官のアラビア服装 ジェッダの Kuraysh Palace Hotel の屋上

地質家は 日中でなければ石の色がよく見えないので 暑い盛りに とぼとぼと歩き廻ることになる。そうした時 疲労と水分不足が重なると 「何の因果で地質家になったのか」と 自分がうらめしくなることもある。

サウジアラビア北部の冬は寒い。12月も末近くになると 北西風が連日吹き荒れ 鉛筆を持つ手の感覚は失なわれて とても一日中仕事を続けることは困難だ。ズボン下・長袖シャツ・セーター・作業服・アノラックを着こみ 毛糸の靴下に革の作業靴をはいて かじかむ手に息を吐きかけながら 調査を進める日もあったが そんな寒い日でも 風を避けて岩蔭に身を寄せると異様な暑さだ。岩蔭に腹ばいになった人夫はいくら呼んでも出てこようとしないし ずる賢い連中は 「今日は寒いな」と思うと仮病をつかって休もうとする。

寒い 朝も夜もまったく寒い。人夫たちのテントの近くではタキ火が赤々と夜空を染めている。でも私たちの所には一片の薪もない。もっとも 人夫たちに

「薪を持ってこい」といえば 彼等は 何 10km も離れた所からわざわざ運んできた薪を 惜気もなく すぐ持ってくるだろう。しかし 私たちは「しのげるだけしのごう。彼等にとっては貴重な薪だし 万一 風邪でもひかせたら大変だ」と自分にいい聞かせながら 時には寒さに耐えかねて 乾からびたミカンの皮や煙草の空函を燃して 気安めの暖をとることが多かった。

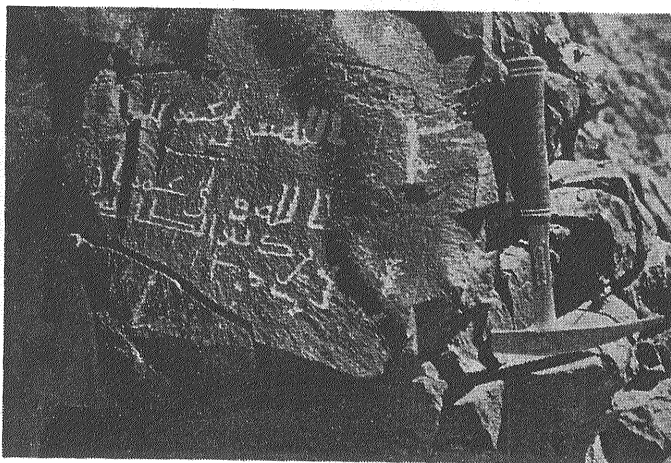
キャンプ生活は楽ではない。まして この国へ来て 2週間後にはヘジャーズ山脈の奥深い Al Aqiq の試験現場へ出発した加藤完氏(第81図)の苦勞は 私の拙い文章では 到底表現できそうにない。

ネジド高原の西縁部に近いこの地域では 冬は0℃以下に気温が下り 夏は50℃を上回ることも決して珍らしくはない。しかも 相談相手も疲れ果てた身を癒してくれるものもなく アラビア人だけが相手では日本語を使うこともない。延1年余にわたる現場生活中 疲労と暑さで 死を予期することが幾度かあったという。

ジェッダへ久しぶりに帰り 偶然に逢った時などは 現場生活にやつれ 頬のこけた彼の姿を見て 私は人知れず うるむ目を押えながら 「残された日を無事に過して欲しい」と 願うことが少なくなかった。

もしも彼が たくましい精神力と健康とに自信をもっていなかったならば 孤独と自然のきびしさに耐えつづけなければならなかったキャンプ生活を 果たして 無事に全うすることができたかどうか疑問である。

加藤氏と行を共にした人夫や運転手たちは 口をそろえて「アッサイド・カトウ・クワイエス(加藤氏はすばらしい)」と私たちに話した。それは 苦樂を共にする現地人への彼の愛情と人徳に対する 彼らの惜しみない讃辞であろう。日頃無口な彼のほのぼのとした人柄がにじみ出た嬉しい話だ。



第82図 Abu Nafeela 鉱山の碑文 現場監督者の名前も刻まれている



第83図 Um Ribhie (磨鉱機の母)鉱山に点在する石ウスの一つ 石ウスの多くは輝緑岩や細粒花崗岩などで造られている

この地域には Um Gurayat 鉱山をはじめ Abu Na-feela(第82図) Abu Seirat Um Hasheem Um Rihie(第83図)など 多くの金山が点在しているが これらの鉱山の多くに Um(母)または Abu(父) という名が付されているのは 金を唯一の富とした古代の人々の欲望のあらわれでもあるだろうか。

Al Nahdein 鉱山を訪れたある日のこと 同行の地質家から Nahdein というアラビア語が「乙女の乳房」を意味することを はじめて教わった。その時笑いながら「ここに見えるのは乳房だけで 奥の方には乙女の魅惑をたたえた もっとすばらしいものがあるという意味で この名前が付けられたのだろうか」と彼に聞くと 彼は 破顔一笑「イムシュアラー(多分ね)」と答えた。しかし 人々の願は空しく その奥には人々を狂わせるほどのすばらしい宝はなかったようだ。

### Al Wajh の ド ク ト ル

明けても暮れても暑さと寒さが急激に変わる天候がつづき そしてまた 明けても暮れても同じ食事があらわれた。朝は固くなったパンとインスタントスープ 昼はスパゲティかマカロニをトマトケチャップで味付したもの そして夜は独特の臭いがする油を入れて煮た飯にトマトケチャップで味付した野菜(といってもせいぜい玉葱とジャガイモ)とコンビーフのゴツ煮だ。この食事が2ヵ月も続いた。いくらその土地の料理に馴れた方がよいとはいっても 全く変りばえのしない料理を毎日食べるには かなりの忍耐力が必要だ。

暑い最中の調査で疲労し 空腹を抱えてキャンプに帰った時 トマトケチャップの色をみただけでうんざりして 食事を抜いたこともあった。しかし よく考えてみれば 体力のはげしい消耗を支えるにはよく食べてよく寝る以外に方法はなく「食わねば死ぬぞ」と自分にいい聞かせながら 薬だと思って食べるが多かった。

そうしたある日の夕方 同僚の一人がはげしい腹痛を訴えたので ジープに同乗して Al Wajh の病院へ急いだが 6時をとくに過ぎていたその時には 病院はすでに閉じていた。切角ここまで来て医者に診てもらわずに帰るではない。折よく居合せたエジプト人の看護婦から医者住居を聞いて早速訪ずれ 訳を話して診察してくれるように頼んだ。痛み止めの注射をしてくれた医者は「赤痢」と診断した。

日頃 良い水を飲んでいないのでこのような病気にかかることも一応は予想していたが 実際に赤痢患者が出たという話も聞かない。もし真性赤痢でキャンプ中の全員が発病したらと思うと恐ろしくもあったが そんな病

気にかかるわけがないと勝手に決めこみ「キャンプに帰ったら胃カタルという診断だったことにしよう」と話し合っ 8時にキャンプに帰った。食事もせずに私たちの帰りを待っていた同僚たちは 心配そうに「どうだった？」と 私たちに聞いた。私が 予定通り「胃カタルという診断だった。皆も生水を飲まないようにと医者が注意したよ」と話すと さすがにほっとして さあ食事しようということになった。

病人は1週間ばかり休養した後すっかり元気になったが「もしこの時本当に赤痢だったら」と思うと 今でもぞーっとする。

同僚の病気がとりもつ縁で 私たちは Al Wajh の医者とすっかり仲良くなった。パキスタンから来ているこのドクトルは 第2次世界大戦中 軍医大尉だったそうだ。後日 私たちは お礼の意味で ドクトルをキャンプに招待して食事を共にし リプトンの紅茶100袋入りを1函進呈した。その折 ドクトルが「バルハルバルは日本から近いですか？」と質問した。瞬間 その意味を解するのにとまどったが「ジェット機で6時間半位の距離です」と返事をした。何のことはない。真珠湾のことだ。中東地域の人たちはエを強く発音するし日本語のパピペペゴの発音がアラビア語にはない。だから 日本人ならパールハーバーというところが パルハルバルになり お巡りさんはポリス 値段はブライス 部品はバルツ Mr はミスタラといった具合だ。はじめは妙に耳ざわりなこの発音も 外国語に弱い私などには 少しなれると 返って判りやすい。

このドクトルも Al Wajh に来た当時は アラビア語をまったく知らなかったらしい。こうしたお医者さんが アラビア語だけしか知らない患者を どのようにして診察し その診断結果をどのようにして理解させるのかということは 少々 興味ある問題だが 私は 幸か不幸か 彼の仕事ぶりを実見する機会を得なかった。

1966年以降 この国の政府機関に勤務する外国人は 政府の指定病院で精密検査を受け 正式の診断書を所属長に提出することになった。

調査地からジェッダへ帰って2日後 私は 通訳に連れられて 外務省の近くにある病院へ精密検査を受けに行った。鼻下に髭を蓄えた格腹のよい2人の医者は私の顔を見て「陽焼して元気そうだね。どこも悪い所は無いですよ」と質問した。私は 唯一言「イエス」と返事しただけだ。血圧を計るでなし 打診一つするわけではなし こういう診察のしかたを 視診とでもいうのだろうか。でも数日後に見せてもらった6枚の診

断書は 日本の病院でもらうものよりは はるかに上等  
そうに見えた。 こういう診察なら私にもできそうだ。

### 一 握 の 種

12月下旬、 キャンプ生活がそろそろ2ヵ月を過ぎよ  
うとする頃 私は キャンプから50kmばかり離れた小  
高い丘の斜面で 石を叩いていた。 肩で一息入れてふ  
と下を見ると モハムードとサウードが 私の方を見て  
大声で何かをいっているが 強風のために よく聞えない。  
はっとして時計を見ると 針はすでにサラー（折  
り）の時間であることを示している。「タイプ  
(o.k.)」と大声で返事をすると 2人は 早速 その準備  
にかかった。「ああ 間にあった良かった」とほっと  
して 急な斜面を 一步一步 慎重に下りる。 仕事  
中はほかの事を考えることはないが 山麓の石の下にはサ  
ソリや毒蛇がいるので 仕事の合間や終わった後は そ  
うした危険に対して神経がとがってくる。

無事に平地へ下りた私は お祈りが終わるまで 平べ  
ったい石の下に腰を下ろして 図面の整理をはじめた。  
ぎらぎらと容赦なく照りつける陽光にさらされながら  
細かい字を書いたり 航空写真を読んだりするのは楽で  
はない。 しばらくすると目が痛くなったり 前額部が  
づきづき痛んでくることもある。

やがて お祈りを終えた2人がやって来て「ショック  
ラン・テシヤラップ・コココーラ（有難うございました。  
コココーラをどうぞ）」といった。 とたんに 喉がごく  
んと鳴った。 考えてみれば 今朝キャンプを出てから  
もう6時間近くぶっつづけに働き 一滴の水さえ飲んで  
いない。「サウード・ハートリー・コココーラ・タラ  
ータ（サウード・コココーラを3本持ってこい）」とはず  
んだ声が自分の口からとび出した時にはおかしくもあり

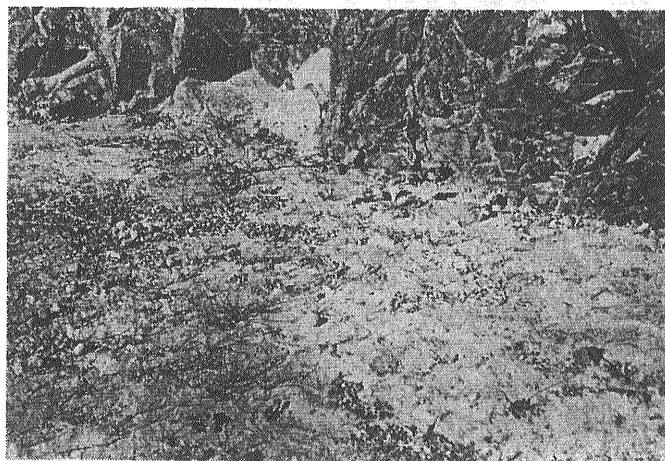
ほっとした表情でコーラを取りにかけ出したサウードの  
嬉しそうな後ろ姿を見て モハムードと2人で吹き出し  
てしまった。

コココーラや水を飲む一時は 調査中では唯一の休み  
時間であり また アラビア語の勉強時間でもある。  
この日も例にもれず 私は モハムードとサラードを先  
生にして 会話の勉強をしていた。 物凄い暑さと焼け  
ただれたような岩肌が 無気味なばかりの静けさと相俟  
って まるで死の世界にいるような錯覚を起こさせる。

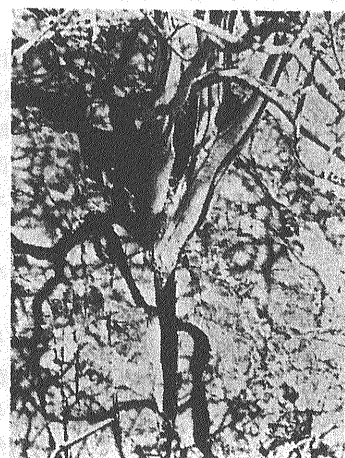
ふと前方を見ると 疲れ切った目に 一かたまりの緑  
がとびこんできた。「ショーフ（見ろ）」といって2人  
をうながし そこへ行って見ると ワデイ（河谷）のク  
ボミに 背丈4~10cmのスイカの蔓が 2m四方ばかり  
の広さに 芽生えている(第84図)。 聞けば ベドウイ  
ンが植えたものだという。 そう聞いた瞬間 私は こ  
の荒蕪たる大地に息づく人々の生きる望のたくましさ  
と切なさに胸をうたれ 実る日の一日も早からんことを祈  
った。

わずかばかりのこの新しい生命のたくましい成長を待  
ちこがれながらそのベドウインは 今 この大地のどこ  
をとぼとぼと旅しているのだろうか。 言語に絶するき  
びしい自然条件にさいなまれながら それを天命と肝に  
銘じて 生きつづけなければならないだろう彼等の辛さ  
を思う時 暑さをうらみ 寒さにぐちをこぼし勝ちな日  
々を送る自分をきびしく叱ることの多かった私である。

スイカの新芽から少し離れた所に1本の木が生えてい  
た(第85図)。 岩を割って生きているその木の幹はいび  
つになっていた。 たくましい生命力。 もし日本でこ  
ういう現象を見ても とくに深く考えることもあるまい。  
しかし 一滴の水もそして湿りさえ見当らない灼熱の地



第84図 谷の片隅に芽生えたハブハブ（西瓜）



第85図 岩の割れ目と木 この木は枯れて  
いるようにみえるが上の方に緑の  
小さな葉をつけていた

でこれを見た私は、この国へきておよそ1年がたっていたその時には、自分とは直接に関係のない、しかもとるに足りないこのようなものを見ても、その生命の行末について真面目に考えるようになっていた。そしてそれは唯単に科学者のはんちゅうに属するであろう自分の未知に対する究明の意欲のあらわれだけではなく、この国の人々のこうしたことに対する目に近いものを自分なりに、知らず知らずの中に、身につけていたからだろうと思う。「郷に入れば郷に従え」という諺があるが未知の世界に足を踏み入れて、そこで事を行なう場合そこに生きつづける人たちの中に精神的にとけこむということはもっとも大事なことのひとつであろうし、またすばらしいことでもあろう。

## 死 と 生 と

生きる環境が、その中に生きていかなければならないものにとって、きびしければきびしい程、その生存者相互の生きるための争は次第に激しくなっていく。それはわれわれ人間の社会においても、動物の世界においても避け得ることのむずかしい宿命かもしれない。そして、時には、他人を守るために自らの生命を断つこともあるし、また、予期せぬ死へ追いやられることもある。

乾き切った地によりやく芽生えたスイカを見た翌日、調査用ジープは、斑駁岩がむき出しになって崖を作っている山峽を、はげしく身をゆすりながら、奥へ奥へと上って行った。このせまい谷へ入ってももの20分も過ぎたろうか。突然、運転手モハムードの目がキラッと光った。急ブレーキをかけて車を停めたモハムードが「シヨフ・ヤミン（右を見る）」という。車から降りてモハムードの後ろからついて行くと、30mばかり先に、仔鹿が1頭白い骨をむき出しにして横たわっている。ハイエナ！。私の脳裏には、ジェッダのオフィスで見たハイエナの美しい姿態が浮んだ。そのハイエナは白地に直径5cmばかりの黒い斑点があり、とても美しかったけれども、その美しさの蔭にかくされたすどい爪と牙はぞーっとする程無気味で、体長は1mほどもあった。

餌を求めてさまよう仔鹿を襲ったハイエナは、己の欲望を存分に満し、満足感に浸ったことだろう。

弱肉強食。それは不毛の砂漠に生きるものにとっては、避けがたい宿命であり、また、自然の掟でもあろう。しかし、そのようないまわしいことは、唯不毛の地に生きるものだけに課せられた避けがたいものだろうか。私にはそうは思えない。われわれが住む社会の内側では、砂漠の掟以上に苛酷なことが、目に余る程

弱い者に押しつけられることが少なくない。がんじがらめにしばられて社会に息する弱者。落陽の丘に座し、暮れなずむ砂漠の静けさに立って、私は、がっくり肩を落した。かぼそい自分の姿を何度想い浮かべたか、しれない。可愛い目を見開いたまま息絶えた仔鹿。そのつぶらな瞳もそしてその美しい姿も、やがては酷熱に焼かれ、砂に打たれて消え果てることだろう。皮膚が破れ、肉をもがれて白骨化する日はそう遠くはあるまい。

仔鹿が無惨な死を遂げた場所を去って間もなく、サウードが奇声をあげた。

「イシハダ（何だ）」

「オーガフ（止まれ）ザップ」

サウードがザップと呼ばれる大形のトカゲを見つけたのだ。

中生紀の爬虫類を想わせるその異様な姿態は私たちの目を奪うに十分である。何かを口先へ持っていくと、真赤な口を大きくあけてパクリと喰いつく。異様にふくれていながら、しわのよった腹と鎧をまとったような尾を持ったこのトカゲは、どう見ても並の代物ではない。ふだんは、そのふくれた腹をべったりと地べたにこすりながら、のそりのそりと歩くくせに、いざ身の危険を感じると、とても信じられない速さで、砂中や岩盤の割目を利用してねぐらへまっしぐらに逃げていく。総じて砂漠の動物は、ふだんはのろまそうに見えて、いざという場合には異常なまでの、びんしょうさを発揮する。かなり遠く離れた所の人の気配をすばやく知り、そして安全な場所へ逃げるところを見れば、こういう不毛の地に生きるものは、外敵を察知するための聴覚が発達し、はずれた土地感と敏しょう性を備えているものらしい。

サウードが見つけたザップのねぐらは、斑駁岩の割れ目を利用して造られていた。サウードがその穴に向かって脱兎のごとくに走り出したとたん、ザップは、負けてはならじとばかりに、その穴へ向かって一目散に走り、サウードより一瞬早く、ねぐらの奥深く、まんまと逃げこむことに成功した。

さあ、サウードの腹の虫は治まらない。久しぶりにうまい肉にありつけるかどうかの瀬戸際だ。サウードは、モハムードの援助を得て、ザップを捕えるための本格的作業にとりかかった。午後2時50分、もう終業時間をとくに過ぎており、仕事の切りもよいので、私は2人のそばで、その作業ぶりを見ることにした。穴の入口付近に転がっている石をはねのけた2人は、細長い木の枝を穴に突込んで、ザップがいることを確かめると

ニタリと笑って 今度はハンマーで岩盤を割りにかかった。入口から 70cm 位の所まで岩盤を割った 2 人は穴尻までもう 30cm 位しかないことを知って「獲物は早わが手中にあり」といった表情で最後の追込みにかかった。硬い岩盤を小さなハンマーで叩き崩していくのだから 作業は中々容易ではない。

でも その作業にかかってから小 1 時間もたった頃には 2 人は穴尻近くまで崩すことに成功した。

サウードが 嬉しそうな顔をして ハンマーの柄を突込んだ。ところが 獲物はいない。穴はそこから左の方へ曲げて掘られていたのだ。ホクソ笑んだのも束の間 2 人はガックリと坐り込んでしまった。

仕事に疲れ 獲物に逃げられた 2 人は 急に疲れが出たらしく それからは口をきかなくなった。

外敵の手の届かぬザツプの棲家 これも生活の知恵がなせるわざであろう。大の男 2 人が必死になって穴を崩している時 その奥で ザツプはどういう思をしてくださう。この勝負は 完全に 人間の負だ。

### クラーヴェンの味

午前 6 時 5 分 シルエットに浮ぶ山の端を 限りなき大空を真紅に染めて 太陽が昇る。今日も暑そうだ。

午前 7 時 調査用自動車は 冷えきったエンジンを温めるために一斉に始動し 出発に備える。

タキ火の回りに車座になって朝食をとる人夫たち 赤々と燃える薪 そして真直に上る煙 早朝のキャンプのたたずまいは平和に満ちているが この静けさも 3 時間とはもたないだろう。そして今日も 酷熱の大地を踏みつけて きびしい作業が続けられるのだ。

澄みきってひんやりとした早朝の空気を一杯に吸いこんだ後 インスタントスープに固くなりかけたパンをかじって 早々に朝食をすませ 7 時半に出発する。

車窓から入ってくる風は心地よく エンジンの響きも快調だ。キャンプを出て間もなく 測量の磯氏を乗せた真赤な中型フォードは左へ曲って Al Gubba 鉱山(第 86 図) へ向かい 桑形氏を乗せたもう一台のフォードは右手の山蔭へ姿を消した。「気をつけて」と互いに声をかけ 手をふりながらそれぞれの持場へ向かうのがいつの間にか 習慣になった。2 人に別れたランドローバーは Wadi Hamalya を 5km 程南下した後 東へコースを変えて Wadi Miah(第 87 図)に入り 砂と石ころの谷底を 喘ぎながら上流へ向かって行く。地質も谷の形も地形も 目まぐるしく変わりはするが もう何度も通っているので 今では空んじる程頭の中に焼きつけられている。

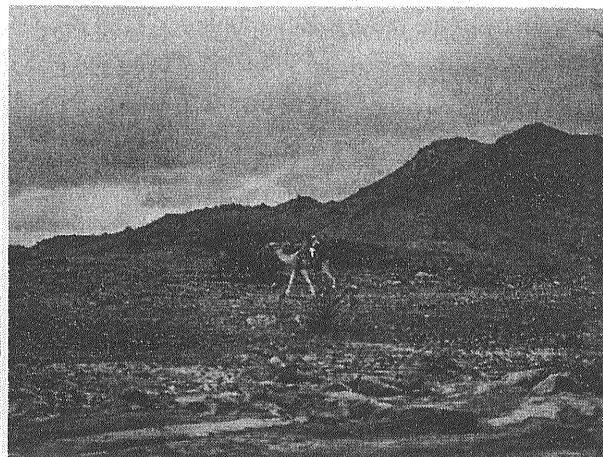
キャンプを出てから 1 時間余り後 本誌 165 号第 24 図に示した不整合が見える Wadi Tufaya で車を捨てる。この頃になるともうじりじりと暑くて水を飲みたくなるが 疲労を最少限度に押え 後のことを考えて水を節約するために ぐっとこらえ モハムード(第 88 図)に車を次の谷へ廻すように指示してから サウードをうながして石を叩きはじめる。1 時間半も歩くと 唇はかさかさになり 喉は乾いて今にもくっつきそうになるが それでも我慢して歩き続ける。

午前 11 時 身体がだるく 足の運びにもぶくなった頃 モハムードが待つ谷へ降りた。10 分間の休憩の間に採取した試料を布袋に移しかえ 2 人をうながして南下する。すでに調査区域をはずれてはいるが 念のために 1.5km の所まで調査して 次の谷へ入る。

ここでは 珍らしく 草を求めて移動しているベドウィンの一家に逢った。どこへ旅するのだろうか 妻と娘をそれぞれラクダに乗せ 息子に羊を追わせて 妻ののっているラクダの手綱をとって歩いてゆく主人 私は



第 86 図 Al Gubba 鉱山の一部 中央の丘の頂上近くにみえるクボミヤ 左端のクボミは探鉱跡



第 87 図 Wadi Miah を行く正装したベドウィン この谷には 2 カ所に井戸があるが その水は常にあるわけではなく 満々と溢えられた水が朝みられても 夕方には一滴もなく 完全に空井戸となっていることもある



仕事の手を休めてその光景を見つめながら「月の砂漠をはるばると 旅のラクダが行きました」という童謡を思い浮かべ しばしの間感概に耽った。

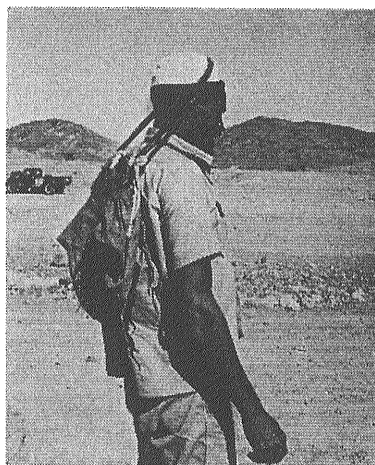
12時10分 車を砂漠に停めて サラーの準備をさせる。そして サラーが終り やっと コカコーラにありつく。生ぬるいコカコーラは決してうまいものではないが それでも 乾燥し切った砂漠で喉を通す時の味は格別だ。この休みの間 今日ではアラビア語の勉強もない。煙草を一本ふかして立上る。モハムードもサウードも 時には「トファッダル・アスバル・シユワイヤ(もう少し待って下さい)」というのに 今日では「ヤンラ(さあ)」といって すーっと立上った。気持ちが良い。私たちがこの頃夜ふけまで仕事をしているのを知っていることだろう。

午後2時。いつもなら調査を終わってキャンプへ向かっている時刻だが 後2時間も歩けばこの区域の調査が終るので 2人に「アバガ・ショゴル・アクサル・サートン(もう2時間仕事をしたいんだが)」という「タイプ・クローヘッド(ok いいですよ)」という返事が返ってきた。多くの運転手や人夫たちは 作業時間が少しでも超過すると 必ずといってよい程 超過勤務手当を要求するのだが 私たちとのつきあいの長いこの2人は ついぞそれを要求したことがない。

「ショックラン(有難う)」と2人に礼をいって立上りそれから1時間40分 懸命に歩いて ようやく一日の仕事を終えた。キャンプを出てこれまでコカコーラ1本飲んだきりだ。仕事が終わったとたんに 空腹と疲労とでぐったりしてしまった。2人の疲れた表情を見ている中に すまなさや愛ほしさがこみあげ 涙があふれてきた。そして私は「マーリシュ(気にしないで下さい)」と辞退する2人に 10リアル(800円)札を1枚づつ握らせた。ここからキャンプまでは40km はたっぷりある。出発して間もなくサウードの声がしなくなった。空腹と疲れとで余程こたえたのだろう 振り返ってみると ぐったりと寝込んでいる。

途中 割合に広々とした所で「アナ・アスーク・セアラ(私が車を運転しよう)」と言うと モハムードはにっこり笑いながら「アナ・ムシュ・ターバン(私は疲れていません)」といって ついに代らなかつた。

Wadi Miah に入ると間もなく 私は ポケットからケントを1本抜いて モハムードに「テシヤラツ(吸えよ)」と言って差出した。モハムードは「ショックラン・ジェツダン・ラーケン・クラーベン・アハサン・アンタ・ターバン・ケテイル ファッダル・テシヤラツ



第88回

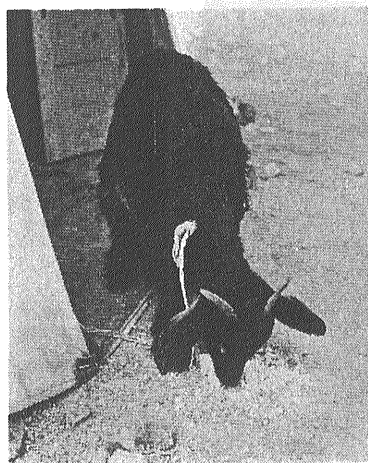
日中羊を追って歩くベドウィンの女性が食糧を入れた皮袋を身につける方法を演習する 動物資源局きつての優秀な運転手モハムード

ブ・ハダ(有難うございます。でもクラーベンの方がおいしいですよ。貴方はとても疲れているからこれを吸って下さい)」といって クラーベンの赤函を私に差出した。

連中のふところ具合が最近さみしいことを知っている私は 一瞬ためらい「クローヘッド」といはいはしたが彼の好意を無にするのも悪いと思って 1本もらって吸い 彼がくわえたタバコにも火をつけてやった。その時のクラーベンのコクのある味と香りは今だに忘れられない。午後4時30分 近道を通って 暑さもようやく下り坂になった頃 キャンプに帰りついた。同僚たちは それまで 空腹をがまんして待っていてくれた。有難いことだ。遅い昼食を終り 調査資料を整理しているうちに夕暮れが迫ってきた。いささか疲れ気味で仕事の区切りはよし あせりぎみの気持を静めるために丘のいただきに登り夕陽を見ているうちにお祈りの声が聞こえてきた。サウードを先頭に 全員一列に並んでメッカに向かい 大地にひれ伏す人々の姿は美しく 私たちの胸をうつものがある。

8時 全員集って夕食。今夜のご馳走は 大使夫人差入れの 残り少なくなった醤油を使って スパゲティを煮込ダウン風にしたもので 中々うまい。

食後。いつもなら雑談に花を咲かせるのだが ジェツダへ帰る日の近い今夜は 早々に外へ出てようやく冷たくなった夜気でねむ気をさまし ベットのおいてあるテントへ引き揚げて ミカン箱を2つ重ねて机代りにし 明日調査する区域の航空写真の判読にかかり 12時すぎにようやく終わる。大きく背伸びして表へ出てみると 人夫達のテントの灯はすでに消えていた。今日も一日 無事だった。仰ぐ夜空の星の光は切なくそして冷たい。



第89図  
残飯をあさる仔羊

### 仔羊の死

キャンプ生活が長びくにつれて人夫や運転手たちのふところさみしくなり、そして食糧も煙草も乏しくなってきた。仕事する間も小脇に抱え、地面に置く時にはまず布を敷いてから置くという風に、後生大事にしていたトランジスターラジオやオーバーなどが競売されるのもこういう時だ。

日本の事情に詳しいあるアラビア商人は「アラビア人の能力は昔から有名だが、実際にはどうなのか」という私の質問に対して「大阪商人の10,000倍、華僑の100倍の能力はあるだろう」と語ったことがある。確かに彼等の商売上手と儲けるためのねばりとは目を見張らせるものがあるが、人夫や運転手達の中には、町で買物をする時には目をつり上げ、口角泡を飛ばして値切るくせに、これが同一人かと疑いたくなる程頓馬なことをする連中がいる。ジェッダを出発する直前に20,000円も出してトランジスターラジオを買ってきた人夫は、出発3日後には、そのラジオを10,000円で仲間に売ったし、また2,000円の中古オーバーは、これから本格的に寒くなるといふ時に、800円で売買された。

物を買った連中は、実際は大損したわけだが、現金を手にして儲けたような気になるのか、妙に気前がよくなり、切角大事な物を手放した代償として得た金を数日の中に使い果たしてしまう。そして煙草さえ買えなくなるわけだ。そうなるやうに、気が立って、些細な事で口論をはじめることが少なくない。そのような場合物見高い連中は、連鎖反応を起こして、自分とは直接に関係のない争の渦に巻きこまれていく。そうしたいさかいは見ていると全く、馬鹿馬鹿しいことでよくいさかいを起

こすものだと、なげかわしくもなるが、それでも連中をよく観察していると、結構勉強になることが多い。

そうしたある日のこと、連中の中では金持である運転手のサイドが、ベドウィンから仔羊(第89図)を1頭買ってきた。ふさふさした真黒い毛でおおわれたその仔羊は、まんまるい目をして人なつこく、とても可愛かった。キャンプへ連れてこられて間もなく、その仔羊はサイドの同僚のアブラヒムに、買値より少々高い値段で買取られた。

アブラヒムは、キャンプ生活の間この仔羊を飼っていて、調査終了後に、ジェッダへ連れて帰るつもりでいたらしい。別に餌代が要るわけではなし、そのまま育てれば、買値の数倍には売れるわけだから、アブラヒムはそれなりの皮算用をしてサイドから買取ったのだらう。ところが、アブラヒムが買取って2日後に、とんでもない事件が起こった。

この仔羊も、多くの羊と同じように、乏しい草や木の葉で飢をしのぎながら育ってきたのであろう。アブラヒムに買われた翌日は、残飯の多い私たちのテントへ来て、朝から晩まで餌をあさっていた。余程空腹だったのか、または、久しぶりにまともな食料にありついた故か、そのケンタンぶりにはわれわれ一同目を見張った。ガツガツとまるで餓鬼のように餌をあさるその姿を見て、私たちは「大丈夫かな、食べすぎではないかな、腹八分目に食べていればいいのにね」などと心配した。

その翌朝、私たちが起きた時には、その仔羊は、可哀相に、はち切れそうな腹をして死に絶えていた。

取るに足りないようなこの事件は、私に貴重な教訓を与えてくれた。きびしい生活条件の下では元気で飛び跳ねていたであろうこの仔羊が、満ち足りた生活をしたばかりに、死への道をたどらなければならなかった厳粛な事実、放任した飼主と放任された仔羊、欲望の果に訪れたもの等々。もし私が日本でこのようなことに遭遇したとしても、それ程深くは考え込まなかつただらう。しかし、私は、その死を目のあたりに見て、ハイエナに襲われて死に絶えた仔鹿を見た時と同じように、この仔羊がたどった道と人間社会において普通に起こりうることに余りにもよく似通っていることに思い当たり、ガク然とした。

全くゆとりのない生活に追われる私だけのヒガ目かもしれぬが、満ち足りた華やかな生活を営む家庭にしばしばみられる子供のヨコシマな道への暴走、自分の子供に限ってそのようなことはないと考えがちな、そして子供を唯放任することを愛情と考え誤まりがちな親、多

くの場合そのような親はやたらと子供を責める。

親の歪んだ愛情は 真の愛情を欲する子供の飢えた心を 決して 満足させはしない。そしてそれは やがて 子供の純な気持を傷つけ 子供の希望を無情に絶ちヨコシマな道へ暴走させることになるのだ。

こうしたことは この仔羊の死に至った過去の一時と共通したものではなかろうか。物質的にいかに恵まれたとしても それは 心のうつろさを決して満してくれはしない。大自然の下 人里を遠く離れた荒涼の地で きびしい労働に励む辛さと寂寥感 そして そこにたくましくまた貧しく生きる人々を見つけてきた眼と心が私を そうした出来事にも深い注意の目を向けさせるようにしむけたように思われる。

### キャンプの午後

死の世界を想わせるような荒涼たる風景と静寂の砂漠での生活には 疲れ果てた私達の心を慰やしてくれるものはない。朝から夜ふけまで懸命の努力を続けて心身共にようやく疲れを感じるようになったある日 昼食をしていた私たちのテントに 一羽の小鳥が入ってきた。スズメに似た足の長いこの小鳥は 私たちの足に止っている蠅をとろうとして一生懸命だ。そして 鋭い口嘴で チョンチョンと足をつつく。5分 10分 懸命の努力が続いたが その小鳥は ついに 一匹の蠅さえ口にすることが出来なかった。私たちは それを見て ビスケットをくだいておいたり 飯粒やミカンの皮をむいて何気なくおき 乏しい水をわざとこぼして 何とかしてこの小鳥と友だちになろうとした。私たちの好意が通じたか または おそれる何ものもないと知って安心したのか その小鳥は 翌日も その翌日も 同じ時刻にテントへやってきた。

4日目 私は ビスケットをつつき水をふくんで天を仰ぎながら 飲むその小鳥の姿を想いながらいつ来るかいつ来るかと待っていたが この日からその小鳥はぱったりと姿を見せなくなった。

暑さに耐えかねたか テントを忘れたのか 私にはその理由が分るよしもないが 気がかりなのは 私たちの心を一時的にせよ慰めてくれたその小鳥が キャンプへ来て食べすぎたあまり 死んだのではなかろうかということだ。物おじしない小鳥 自分の意のままに生きてであろう小鳥 そして みにくい欲望と感情とのおりなす みにくくわずらわしい人間社会を避けて 神を信じ自然のままに生きることに きっと無上の喜びを感じているであろうベドウインの心を 私が理解しそうなったのは この小鳥の死後間もなくだった。

私が この小鳥のために 人知れず岩蔭にきざいた小さなケルンが アラビアの苛酷なまでにきびしい自然条件にくずれ去ることのないようにと願うのは 唯 私のセンチメンタリズムのなせるワザだろうか。

キャンプ生活中 西の彼方に沈みゆく夕陽を見つめながら 小高い丘の頂にポツンと坐っている人夫や運転手の姿をよく見かけた。容赦なく照りつける太陽を忌み嫌い 冷たい光をやさしく投げかける月と星をあがめる彼等が 何をしているのか 何を考えているのかは私には判らない。私には そうした彼等の姿は 一日の無事を神に謝し われを忘れて大自然の美しさにうたれているように思えた。そして私は 詩を愛する優しいアラブの姿の一面を そこに見出したように思った。

いつだったか 私は「物言わぬ自然と楽しく語らうことのできる者だけが 地質家という 特種な職業に従事する者になることができるのではなかろうか」と何かに書いたことがあるが 宵暗の砂漠に そして 茜さす丘の頂に立って 童謡を唄い 詩を吟じた自分の姿をふり返ってみて それは 決して 遠く離れた子を想い妻を恋う心のあらわれだけではなかったと思う。

### 美わしき暗夜

その夜は 月もなく 風もなく 不気味に静まり返った荒涼の地に 大粒の星の光りがいやに冷たかった。

夕食後間もなく 通訳と数人の人夫が 私たちのテントへ来て「今晚この近くでベドウインの結婚式があるから行きましょう」と私たちを誘った。私たちは 一瞬彼等に同行することをためらった。それは この国では男女間の問題がうるさく 女性の場に異国の男性が行くことが許されないことを知っていたので 行ってもし いさかいが起こったら無事に帰れるかどうか分からないという恐怖心があったからだ。でも 「今夜日本人がお祝に来ることを昼間のうちに話して了解を得てあるから 絶対に大丈夫」という通訳のことばと この国のすべてを知りたいと思う欲望とで 結婚式場へ連れていってもらうことにした。

キャンプ地から 4km ばかり離れた植生地に点々と火が見える。結婚式場のタキ火だ。私たちは そこに着いてすぐ 長老たちが集っている場所へ行った。

タキ火を囲む人の輪の中に花ムコさんもおり 一応初対面の挨拶をしたものの さあ お祝の詞が分からない「エルバラカ・フィーク (神の恵みがありますように)」はお悔みのことばだし 「エンタ・タイプ」では的は

ずれのように、新婚者やその近親者に対して用いる「ムバーラク・マア・アメルト（貴方の行いに恵みあらんことを）」ということばをどうしても思い出せない。まごまごしていると、頭の回転がすごく早い上に強心臓の持主である通訳が早速「Um Gurayat 鉱山を調査している日本人ドクトルがわざわざお祝に来てくれた」と口をはさむと、居並ぶ人たちは口々に「ショックラン」と言いながら私たちにゆっくりするようにすすめてくれた。墨を流したような闇の中で、ひんやりした空気を胸一杯に吸い、タキ火を囲んで語り合うのは楽しいものだ。私たちはお祝として用意してきた何がしかの金を通訳を通じて花ムコさんに進呈したが、その時の花ムコははじめ皆の喜びようはたいへんなものだった。

しばらくの間お茶を飲みながら雑談した後、私たちはお祝の踊の場へ案内された。独特の単調な節廻しと手拍手で、二手に並んで歌う男たちのお祝の唄のリズムにのって、真黒の装束に身を包み、膝黒の闇の中にタキ火のほのかな灯を浴びて、足を踏み鳴らして踊る花嫁の姿、その光景は不気味でさえあるが、日頃しかつめらしい結婚式を見なれている私には羨しいほどの隣人愛さえ感じさせた。これも、集団に生き、集団に対する平等の権利と義務とを有するベドウインの生活の現われであろうか。「いうは易く、行は難し」という格言を私達は知っている。しかし、この世の中で、真に民主化を思い、己の心に恥じない行をしている人がどれほどいるだろうか。真実一路を歩くことのむずかしい今の世の中ではあるが、それを妨げる何物かがあるとしても、その道を歩かなくても良いということにはならない。

酷熱の砂漠をわたり、天を突く岩山を越えて、幾日も歩きつづけて友の結婚式に馳せ参じた200名余りのこの人達のふるまいと闇に燃ゆる炎とを見つめながら、私は集団生活と人の道のあり方を教えられたような気がした。

小1時間もいただろうか、私達は明日の仕事に備えて、キャンプへ引揚げることにした。居並ぶ人々に別れを告げて車に乗った直後、突然、車の後部に乗っている人夫達と車の側まで見送りに来た人達との間に激しい口論が起こった。早口でまくしたてることばの意味は完全には分らないが、どうやら羊のことらしいので、人夫が運転手が羊にいたずらでもしてケンカになったに違いないと、いささか心配になってきた。その中に、車の後扉がパタンと開かれ、何がドサリと投げこまれたびっくりして後ろを振り返ると、丸々と太った大きな羊がキョトンとした顔付で立っている。何のことはない、私達が花ムコに進呈したわずかばかりのお祝儀の返礼と

して、花ムコが私達に羊をくれたのだ。これで読めた。先程のはげしいやりとりは、羊を進呈しようとする花ムコ側と、内心では欲しくてうずうずしているくせにアラブ特有の必要以上とさえ思えるゼスチュアでそれを固辞しようとする人夫や運転手達との間の舌戦だったのだ。どう安く見積っても10,000円はしそうな立派な羊なので、私たちはそれを受取ることを辞退したが、結局はキャンプへ同道することにした。

そしてその翌日、その羊はナイフで喉を裂かれて、声を出す間もなく昇天し、その肉はほとんど全部、人夫や運転手の腹に収まった。

「人の揮で相撲をとる」という諺を地でいった人夫や運転手達、ウマウマとしてやられた私達こそいいツラの皮だ。でも、ベドウインの結婚式に出られるということは中々できないことだし、また、その後ベドウインと急速に親しくなれたことを思えば、むしろ、連中に感謝しなければなるまい。こうしたことがあった後、Al Wajh 地域のベドウインは、私達の車を見かけると走り寄って、お茶を飲んでいってくれとか、寒いから火にあたってくれなどとよくすすめてくれたし、私達も、友好を保つためにも、また、彼等から古代の鉱山に関する情報を得るためにも、出来るだけ彼等の好意に甘え、時には水を分けてやったりした。彼等にとってはもっとも貴重な水や砂糖や紅茶、時には、遠く離れた町から子供にわざわざ買ってきたわずかばかりの菓子を惜し気もなく私達にご馳走してくれる彼等に親しく接してみても、私は人としてのあり方をどれ程考えさせられたか、少ない。少なくとも私にとっては、彼等が互に相容れない異民族でないことは確かだ。

#### キャンプの正月

12月31日もふだんと変わらずしんとふけてゆく夜の一時、日本を出発して以来のことを想い浮かべながら、皆で雑談に耽った。午後11時半頃、誰かが「今年は年越そばも食えないなあ」としみじみ言った。私がトッサに「食べようか」というと、一同ケゲンな顔をして「あったらね」。私は早速炊事場へ行って、スパゲティを2函、約20分かけて煮た後、出張前に家族から航空小包で送られてきたインスタントミソ汁の封を切り、コンビーフでダシをとり、玉葱を刻みこんで、一見煮込みうどん風のものを作り、ぐらぐら煮込んでいるのをテントへ運び込んだ。それを食べる皆の顔は、まるで子供がすばらしいケーキに食いついたように、喜色満面。「ああウメエ、ああウメエ」の連発だった。惜しむらくは、醤油がなく、インスタントミソ汁もこれでハラ-

ス(終り)になったことだ。こうして 遠い故国を偲びながら 1963年は静かに去っていったのです。

1964年元旦もいつもと何等変ることなく明けた。今日から3日間は休みだ。午前9時頃 朝食を前にして一同「お目出度うございます」と新年の挨拶を交す。酒があるわけではなし。おミキ代りのコーヒーや紅茶を飲み いつもと同じ食事だ。この頃になると 人夫や運転手がやって来て 口々に「クンロ・サナ・ワア・エンタ・タイプ(お目出度うございます)」と挨拶する。太陰暦を使っている彼等にとっては この日がふだんと変らないだけに とくにあらたまる必要はないわけだが それだけに彼等の行為は気持がよい。

3日間の休みと知って 彼等の多くは洗濯したり 町へ出かけたり お茶を飲みながら雑談に耽ったり のんびりと楽しんでいる。日頃仕事に追われている彼等なので 私達は この休みに運動会をやることを思いついた。

賞金が出るという聞いた彼等の張切りようはたいへんなものだ。賞金は1等から3等までで 賞金をとれなかった者には参加賞を出すことにした。競技種目は200mの徒歩・リレー・パン食い競争ならぬビスケット食い競争・約4kmのマラソンである。

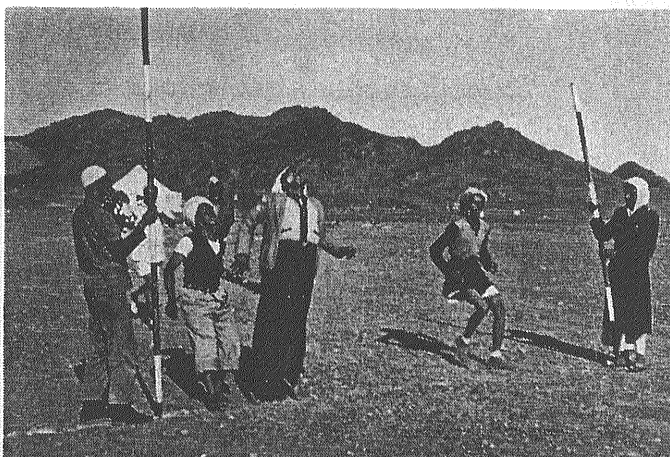
徒歩やリレーはやはり若い者が勝つことは当然だが リレーチームに 寝る時以外は弾帯をはずさないガイドやお年寄が入っているとたいへんだ。生きのよい若い連中がいくら頑張ってもこの連中に代るとすぐ逆転され 結局は 若い者がお年寄達にくってかかって口論をはじめ。ビスケット食い競争(第90図)に使ったビスケットは 私達がそれまでに食べた中では 最高にうまいギリス製だった。このことを知ってか知らずか この競争に出ても勝目がないと思っている連中は 糸で

吊されたビスケットを食べた後でもっと食べさせてくれと真顔でいう。それが子供を数人もっているいいお父ツアンだけに 全くおかしい。

陸上競技の最後を飾るのはマラソンだ。病人を除く全員が参加したこの競技は 将に抱腹絶倒のものである。折返点に待機している桑形技官から手の平にサインしてもらい 決勝点に帰った順に順位が決まることを出発前に説明したのだが 連中の習性とさえ思える自己主張のために 着順決定の折にはかなり混乱した。

出発して200mも走らないうちに 人夫のモンソールが転んだ。50才近いこのオジサンは サロンをしたまま走ったので それがずり落ちて足をとられたのだ。普通ならば再びずり落ちないようにちゃんと直すか または それをぬぎすててパンツ姿で走るところだが 先を行く仲間に遅れまいとして気があせるのか 彼はそれをずり上げたまま 左手で押えて再び走り出した。どう考えても これから4kmも走ろうというのに その格好でまともに走り通せるものではない。まして先を走る連中よりも御老体とあってはなおさらのことだ。彼の珍妙な姿と走り方を見て しばらくは笑が止まらなかった。マラソンの一着は さすがに 落下傘部隊出身の人夫モハムードだった。決勝点に入った順に並べせる。さて賞金を渡す段になって のんびりの帰って来た若者から「俺が1等だ」と 文句が出た。ふだん早とちり勝のこの若者は 折返点に一番早く着いたので自分が1位だと主張したわけだ。しかし彼の主張は 出発前に説明されたルールに忠実に守って走り抜いた連中の反撃にあったあげく「モッホ・マーフィ(脳なし)」「ゼア・ヘマール(ロバみたいだ)」などと悪口を沿びせられて もちろん容れられなかった。

人里を遠く離れ 耐え難い暑さと疲労とにさいなまれながらもきびしい自然との対決に斗志をかきたて 時には 心をいやしてくれる何もものない奥地で 美しい人の心にふれて キャンプ生活は 喜怒哀楽の織りなす人間模様を画きながら 終末を迎える。そして 苦楽を分かち合った人夫や運転手達の顔は その日を迎える喜びと彼等の帰りを待ち侘びる家族に逢える楽しみとで 日一日と晴れやかになってゆく。別れは辛くそして悲しいもの そして待つ楽しみを与えてくれるもの 長かったキャンプ生活は無事に終わった。しかし ジェツダへの道は遠い。(筆者は 鉱床部)



第90図 1964年元旦 Um Gurayat 鉱山での運動会の1コマ「ビスケット食い競争」とび上れば早く食えるというものではないが……